7/22 朝日

値上げラッシュ まだ続く

乳製品続々 10月いったんピークか

6月の消費者物価指数は前年同月比の上昇率が3・3%と、2カ月ぶりに伸び幅が増えた。今後も乳製品など食料品を中心に値上げラッシュが続きそうだ。日銀の金融政策の行方にも注目が集まっている。

▼3面参照

ロシア動向 さらなるリスク

雪印メグミルクは7月にチーズやヨーグルトなど20品目を4・8～14・0%値上げした。8月には牛乳やヨーグルト、プリンなど68品目を4・3～17・7%上げる。エサ代や物流費が高騰しているためという。明治や森永乳業、江崎グリコも値上げに踏み切る。

生乳の取引価格（乳価）は、毎年春に大手メーカーと生産者団体が協議して決める。だが物価高で酪農家の経営が苦しくなり、昨年11月と今年8月にも特別に値上げすることになった。雪印の広報担当者は「乳価を春以外に変えるのは珍しい。生産基盤を守って安定供給に努めたい」と話す。

帝国データバンクによると、夏以降も食品の値上げが続く。10月には酒類や調味料など3716品目の値上げが予定されており、8千品目に届く可能性もあるという。ただ原料高を転嫁する動きは落ち着きつつあり、「値上げラッシュ」はいったん10月にピークを迎えるとみられる。

一方、ロシアが今月17日にウクライナからの穀物輸出に関する協定延長に反対を通知したことで、国際的な食料価格が高騰するおそれが出てきた。

帝国データの担当者は「ロシアの動向次第では11月以降も食品の値上げが続くかもしれない。（国内の）食品工場の働き手も不足しており、人件費のアップも今後の値上げにつながる可能性がある」と話す。

（米谷陽一）

日銀の見通し 焦点

消費者物価指数の上昇率は高止まりが続き、15カ月連続で日本銀行がめざす2%を上回った。このため市場の一部では、日銀が今月27、28日に開く金融政策決定会合で物価の見通しを引き上げ、金融政策の修正に踏み切るとの見方がある。

日銀はこの会合で、3カ月おきに公表する物価上昇率の見通しを示す。前回4月の2023年度の見通しは1・8%。物価上昇の主因である原油など原材料の高騰は収まってきており、上昇率は今年度半ばにかけて縮小するとしてきた。

しかし想定よりも物価高は長引き、植田和男総裁も先月の会見で「下がり方が思っていたよりもやや遅い」との認識を示した。民間の一部には、日銀が23年度の見通しを2%台半ばに修正するとの見方もある。

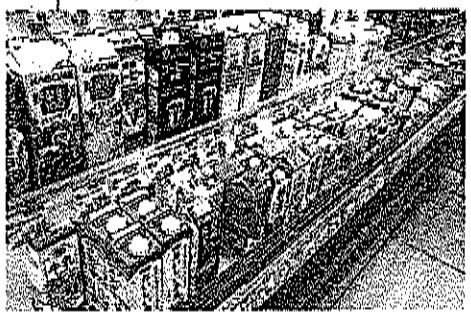
日銀が金融政策の修正に動くかのポイントは、24年度以降、賃金上昇を伴う形での物価上昇が続くかどうかだ。

今春闘では30年ぶりの賃上げ率となったが、これまでの日銀はその持続性について「不確実性が高い」としてきた。植田氏は今月18日の会見で「持続的・安定的な2%のインフレの達成にはまだ距離がある」と従来の見解を示した上で、次回会合で「改めてきちんとチェックする」と述べた。

（土屋新平）

値上げ幅が大きい主な品目
6月の消費者物価指数、前年同月比

たまご	35.7%
炭酸飲料	17.4
ハンバーガー	17.1
食用油	16.5
アイスクリーム	12.0
牛乳	9.6
携帯電話	19.3
宿泊料	5.5



スーパーの店頭では食料品の値上げが続いている